2013 年度 島嶼学概論 I 「硫黄島実習を通して感じたこと」 鹿児島大学大学院 理工学研究科 地球環境科学専攻 西條 喜来

• 概要

三島村 三島村は竹島、硫黄島、黒島の三つの島から成る村である。薩摩半島南端の長崎鼻から南南西約 40km の位置にある竹島・硫黄島、坊ノ岬から南西約 50km の位置にある黒島の三島及び無人の新硫黄島や数個の岩礁から成り立っており、九州南端から南西にのびる南西諸島の最北部に位置している。竹島と硫黄島及び周辺の岩礁は大型カルデラで、7300 年前に大噴火した鬼界カルデラの北西縁にあたる陸上部分をなしている。

硫黄島 フェリーで竹島より約30分で到着する。赤茶色の海と硫黄の匂い、そしてジャンベの力強い音が出迎えてくれる。三つの島の中心に位置し、周囲14.5km、面積11.7kmを誇り、椿、つつじ、車輪梅の原生林が生い茂る。島のどこにいても見える硫黄岳は、島の象徴とも言うべき存在感を持つ。また、野生の孔雀が街中を闊歩するのどかな風景が見られる島である。平成8年に世界初、伝説の島の砂舞台で上演された三島村歌舞伎「俊寛」は有名である。

・島の教育

大きな課題の一つに、島で育った子どもたちをいかにして将来島に呼び戻せるかという問題が挙げられる。硫黄島唯一の小学校では、渡り蝶であるアサギマダラを例えに、"君たちもいつか島を出て行く日が来る。"と子どもたちに教える。硫黄島には高等学校がなく、中学校を卒業した子どもたちは島外に進学してしまうためである。そして、硫黄島の砂浜に産卵のために訪れるウミガメを例に、"いつか島に帰ってきてほしい。"という思いを伝えるのだと言う。

豊富な硫黄の輸出が盛んだった頃には人口が 700人を超え、子どもは100人を超えた硫黄島だ が、現在在校生は数名足らずで、小学校は数年後 には廃校の危機に迫られている。また、島には就 職口がないために、進学後に島に戻ってくる子ど もたちは少ない。これにより、少子高齢化、そし てさらなる人口減少に拍車をかけている。

島での教育の最大の魅力は、子どもを見守り育てるコミュニティが形成されていることだと私は考える。硫黄島では島全体で子どもたちを育てているという印象を受けた。学校では先生との対話の時間が十分にあり、身近な様々な人と挨拶をし、会話もある。そして、ジャンベ体験等を通して地域貢献ができる。このように、子どもたち自身が自分の存在意義を見つけやすい好環境が整っているのだと感じた。

また、硫黄島では小・中学生の「しおかぜ留学制度」を実施している。この制度は、島の里親のもとで生活し、温かい島の人々と触れ合い、自然の中で伸び伸びと学ぶという内容である。引きこもりがちな子どもやいじめられた子どもが島に来ると、最初は内向的だがどんどん心を開いて元気にたくましく育つという話を聞いて、島ならではの力だと感じた。この制度が日本でより広く認知されれば、この制度を利用する子どもは増えていくに違いない。都会で窮屈に生活するよりは遥かに魅力的で健康的なものだと感じた。

・ジャンベ

ジャンベとは、西アフリカに伝わる伝統打楽器である。硫黄島では、アジアで初めてジャンベを本格的に習うことのできるジャンベスクールを開校した。初めてジャンベという楽器を目にしたとき、私は日本人が独自のもののようにジャンベを演奏する姿など想像できなかった。しかし、実際ジャンベの研修を受け演奏を聴くと、昔からこの土地に伝わっていたかのような歴史が感じら



れ、また島に違和感なく馴染んでいることに驚いた。その情熱的な演奏や踊りから島の方々がジャンベを大切にする気持ち、そしてジャンベを通じて硫黄島を盛り上げようとする想いが伝わってきた。音楽の力、ジャンベの力によってこの島は支えられ、元気でいられるような気さえしてきた。

・ウミガメ

日本の砂浜ではアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイのメスが産卵のために上陸する。 東南に屋久島・種子島、南にトカラ列島を望む硫黄島の位置を考えると、アカウミガメ、 アオウミガメの上陸が予想される。島に住む人の話によると踏査を行っており、産卵期に は毎晩アカウミガメが上陸しているという。砂浜の大部分は港に生まれ変わり、現在その 一部分が残っている。

昔はカメ卵当番と言うものがあったという貴重な体験談を聞くことができた。母ガメが 120 個産む卵のうち 20 個を残し、100 個を持ち帰り、1 個 20 円で売ったそうだ。産み落と

された卵の一部を残して持ち帰ったと言う話は、 日本の他地域の産卵地でもよく耳にするが、ここ 硫黄島でもその習慣があったとは驚きである。

宿泊した日の晩、23 時頃に硫黄島港横の砂浜に 出てみると丁度産卵を終えて穴を埋め、帰海の準 備をしているアカウミガメに遭遇することができ た(★の位置にて)。混獲の際や他の調査地で装着



しているタグはなく、新規個体なのか既産卵個体なのかは不明だが、硫黄島という場所で ウミガメの産卵シーンに居合わせるなど考えてもいなかったため、非常に意味深い経験と なった。この個体の他にもいくつか足跡が残っており、硫黄島もアカウミガメの重要な産 卵地である可能性も考えられる。

島とは

硫黄島は鹿児島港からフェリーで約3時間半しかかからず、こんなに身近にあるのだということが最初の発見だった。"島"と言うと、距離が遠くて狭くて何もない…そんな印象を持たれがちではあるが、そのような狭義的なものではなく歴史も文化もあり、非常に奥深い存在であるのだと改めて感じさせられた。ちょっと遊びに行く感覚で訪れることもできるし、島ならではの時間の流れや自然の景色には心を打つものがあり、大きな力を秘めていると感じた。

夜に行われた交流会では、島での暮らしについて生の声を聞くことができた。農業に関しては、畜産が主となり農作物は生産が難しいと言う。漁業に関しては、好漁場があるが整備不足や活魚の出荷の困難さから、その資源を活かしきれていないようである。また、帰りの船内での話によると、フェリーの事業収益がほとんど上がらず赤字航路のため民間企業が進出しないことから、村民の命を守る生活航路として村が運営しているとのことであった。まだまだ課題は多く不便な面もあるが、島の方々は島に誇りを持ち、前向きに新たな試みをしていく考えであった。

硫黄島を実際に訪れてみて、この講義の中で何度も聞いた「島には何もないが、全てがある。」という言葉は本当なのだと心に沁みた。

最後に

先生方、お世話になった島民の方々、関係者の皆様に心より感謝いたします。 ありがとうございました。